一般財団法人市川市福祉公社

令和７年度　第１回　介護・医療連携推進会議　議事録

1.　日　時：　令和７年８月 26 日（火）　　10 時 30 分～11 時 30 分
2.　場　所：　アイ・リンクルーム　第１会議室
3.　出席者：　19 名

〔委　員〕

議長	村尾　薫	委員
委員	篠塚　里恵	委員
	松野　大樹	委員
	工藤　茂	委員

以上　委員　４名

〔オブザーバー〕

市川市福祉部介護保険課	梅木	様
高齢者サポートセンター市川第一	小川	様
高齢者サポートセンター市川第二	高松	様
高齢者サポートセンター市川東部	久村	様
高齢者サポートセンター菅野・須和田	高山	様
高齢者サポートセンター菅野・須和田	長田	様
高齢者サポートセンター八幡	今井	様
高齢者サポートセンター信篤・二俣	井ノ元	様
高齢者サポートセンター宮久保・下貝塚	室	様
高齢者サポートセンター宮久保・下貝塚	清水	様
くらしさ南行徳	多治見	様

以上　オブザーバー　12 名

〔事務局〕

・当該事業・管理者
　西部・巡回ヘルパーステーション　　西田　賢二
・当該事業・計画作成責任者
　西部・巡回ヘルパーステーション係長　馬場　晃弘
・北部ヘルパーステーション係長　　萬徳　雄一

以上　事務局　３名

■　次　第

（1）事務局より資料の説明を行う

・令和７年度　第１回　介護・医療連携推進会議資料

・利用者一覧

（2）北部ヘルパーステーション・萬徳より挨拶

（3）委員・オブザーバーのご紹介

（4）事務局紹介

（5）議長・副議長の選出

●サービス提供等状況報告・相談受付状況について

(事務局)

・資料に沿い令和７年１月～6 月のサービス提供等状況、相談状況を報告した。

〇意見・質疑応答

・定期巡回型の相談から夜間対応型に至った経緯を伺いたい。

(事務局)当初は定期巡回型での打診だったが、訪問時間や回数が、相談があった時点での人員配置やスケジュールの調整が非常に厳しかった。結果的に訪問介護事業者が複数入り、当社は夜間対応型訪問介護で対応する結果になった。

・地域住民として相談を受けて、それを担当ケアマネに繋げることがある。

このようなサービスもある、と周知できればよいと思う。

(事務局)介護保険のサービスが増えたということは、利用者側にとってもサービスの選択の幅が増えたともいえる。利用者を取り巻く環境によってさまざまな選択肢が生まれている。結果的に当社の利用者は６名で増減せず推移している。マンパワー不足、という状況ではあるが、この先も新規相談を通じて定期巡回型が適切か、それ以外の事業が適切かを決めていく事ができるのではと考える。

●事例報告

(事務局)

・資料に沿い利用者の事例報告を行った。

〇意見・質疑応答

・介護４とのことだが身体状況についてどのような状況か。

(⇒事務局)脳梗塞による影響が大きい。認知面については日常生活に重大な支障こそなかったが、自身の意見がコロコロ変化してしまうことが多く、顕著なものとして服薬介助を行おうとするも「病人じゃない」と言われてしまうこともあった。

・アクシデントを機に施設入所となったようだが、本人や家族の意思はどうだったか。

(⇒事務局)本人の意思としては「施設でもよい」と言う日もあれば「自宅がよい」という

日もあったため、真意はわからない。ただ、ショートステイという形で施設に入ってからしばらく経つが、“帰宅したい”といった要望は聞かれず今の所経過しているので、結果的にはよかったのではないかと思う。
・同様のケースがある時に、長く自宅で生活できるようにするためにどのようなことができるか。
(⇒事務局)本人宅を取り巻く環境により判断は難しいこともある。本人・家族・事業者間で情報を共有していく必要があると考える。
・もともと疾病が多い方だったので、担当者会議や本人家族の思いを通じて、もっと多職種で共同・連携できれば、よりよい支援ができたかもしれない。
・自身も後見人として似たようなケースがあった。色んな提案もできたかもしれないが、本人自身で決めた選択も尊重されるべきであると思う。
・この方に限らずだが、昨今のAI技術を活用して、ホームカメラの導入などで昨今どの事業にもあるマンパワー不足解消に繋げられるかもしれない。現場から市や県に声を上げていく事も必要だと思う。
(⇒事務局)貴重なご意見ありがとうございます。

●オブザーバーからの意見・質疑
・随時訪問が多かったが、随時対応として解決できるものはあったのか？
(⇒事務局)随時対応のほぼ100%が排泄介助などの訪問要請だったので、随時対応として解決できるものは無かったが、対応のやりとりによっては、解決できるものはあると思う。
・利用者の緊急搬送等はあったのか？医療の体制はどのようになっていたか？
(⇒事務局)当利用者には往診医が入っており、その医師とのやり取りの中で決めていた。結果的に緊急搬送することはなかったが、医師やケアマネ・家族と連携を取りながら対応していた。
・食事の状況はどうだったのだろうか？
(⇒事務局)宅配弁当が１日２回届いていた。おそらくだが、食べかけの弁当が６月の気候で悪くなってしまい、それがお腹を壊す引き金になってしまったもの思われる。
・私たちは高サポの立場として、定期巡回型として直接的なアプローチの機会は少ないが、これを機に当該事業への認知が広まって行けばと思う。
・随時訪問は当該事業の醍醐味のひとつでもあると思う。マンパワー不足で利用者の増数が難しいことも理解はしているが、引き続きケアマネなどへの周知は必要だと思う。また高サポならではの、家族介護教室の開催を通じての周知もできると思う。
・独居のケースも増えているが、時代の変化に合わせてAIなどの活用も必要なのではないかと思う。

・要介護見込みのケースを退院～小規模多機能型の施設に繋げたことがあったが、心身状況が悪化し、すぐ再入院になってしまったケースがあった。退院にあたって他にも選択肢が

あったのではないかと振り返っている。今回の会議を通じてもっと色々な提案ができればと思う。
・私どももそうだが、マンパワー不足はどの業界にもあると思う。大変ではあると思うが、工夫していければと思う。
(事務局)貴重なご意見ありがとうございます。

■ 閉会
閉会にあたり管理者西田より挨拶
・次回介護医療連携推進会議予定　令和８年２月中旬を予定としている。

以上

文責：市川市福祉公社
北部ヘルパーステーション　萬徳　雄一